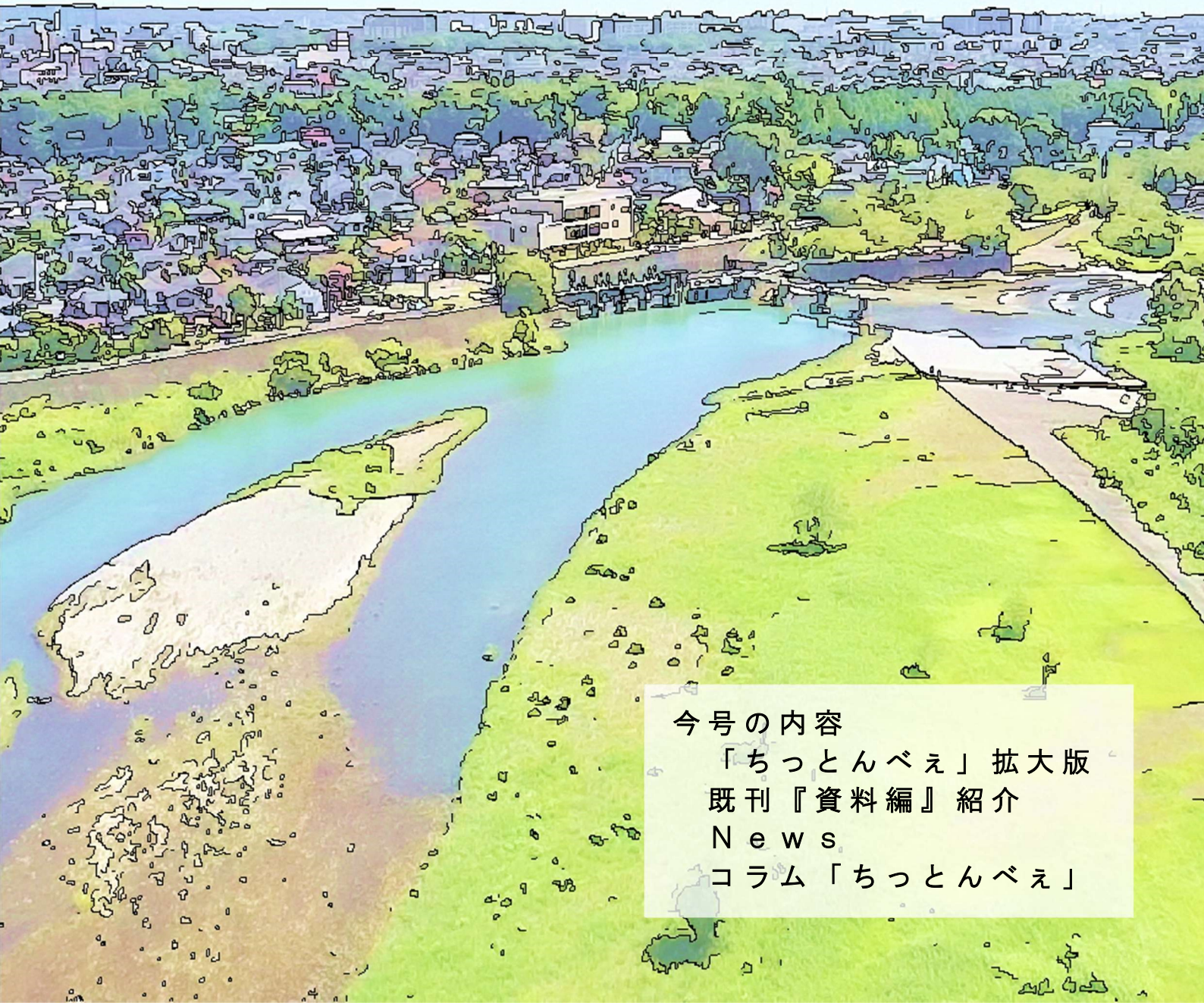
羽村市史編さんだより

令和5年4月

第32号

伸びゆくはむら

特集 市史編さん事業のあゆみ



今号の内容

「ちっとんべぇ」拡大版
既刊『資料編』紹介
News
コラム「ちっとんべぇ」

特 集

市史編さん事業のあゆみ

これまで取り組んできた市史編さん事業の成果として、いよいよ令和５年度に『羽村市史本編』（上巻）を刊行する予定です。市史編さん事業ではこれまでに資料編を６冊刊行してきましたが、その成果をもとに本編を編さんしていきます。刊行年度の始まりのタイミングをとらえて、今回の『伸びゆくはむら』では市史編さん事業のあゆみを振り返ります。

◆ 市史編さん室の立ち上げ

平成 26 年４月１日、羽村市企画総務部（当時）内に市史編さん室が発足しました。『羽村町史』の刊行から 40 年ぶりに市史編さん事業が復活したことになります。

◆ 市史編さん委員会の開催

市史の内容や構成に関して協議するとともに、市史全体の監修を行う組織として市史編さん委員会が設置されています。

第１回市史編さん委員会は平成 26 年 10 月３日に開催されました。委員 10 名と顧問からなる委員会では市史の編さんについて多くの意見が交わされました。

◆ 『伸びゆくはむら』創刊号の発行

『羽村市史編さんだより 伸びゆくはむら』は平成 27 年４月 15 日に創刊しました。市史編さん事業の進捗状況やトピックスを皆さんにお知らせするため、年４回発行してきました。

▲『伸びゆくはむら』創刊号タイトル

◆ 部会活動の推進

平成 27 年度からは、分野ごとに５つの部会の活動が精力的に行われるようになりました。自然や文化財、人びとの生活、現代への移り変り、関係する自治体の史料などを詳しく調べることで、歴史が浮かび上がってきます。

▲市内巡検の様子

◆ 地域別聞き取り調査の実施

羽村市域の人びとの習俗や伝承について調べるため、第５部会（民俗担当）による聞き取り調査を行いました。平成 27 年８月と平成 28 年２月に地区会館で実施した調査では、多くの方から昔の衣食住や冠婚葬祭などのお話を聞くことができました。

◆ 羽村市史関連講座の開催

市史編さんの過程で得られた成果を一足早く市民に還元するため、市史関連講座を実施しています。平成 27 年 12 月５日の第１回は「民俗調査から見えてくる羽村の生活の様子」をテーマに開催しました。

◆ 『羽村市史 資料編』の刊行 ①

市史編さん室が発足してから４年。多くの方のご協力のもと、最初の資料編２冊が刊行となりました。平成 30 年３月に刊行となったのは『資料編 中世』と『資料編 近現代図録』です。

担当した第１部会（考古・中世担当）と第３部会（近現代担当）はそれぞれもう１冊の資料編を刊行するため、引き続き調査・執筆に取り組みます。

◆ 『羽村市史 資料編』の刊行 ②

翌年の平成 31 年３月には、続く資料編として『資料編 近世』と『資料編 自然』が刊行となりました。これで資料編は４冊となり、本棚に並べると見栄えするようになってきました。

担当した第２部会（近世担当）と第４部会（自然担当）は、この後、本編の準備にとりかかります。

◆ 『羽村市史 資料編』の刊行 ③

時代は令和に移り、新型コロナウイルスの感染拡大が続く令和３年３月には次の資料編２冊が刊行となりました。『資料編 考古・中世補遺』と『資料編 民俗』です。

第１部会では、『資料編 中世』の刊行以降も継続して調査をするなかで、新たに貴重な史料調査を実現できたことから、その成果を補遺として『資料編 考古』に掲載しました。

◆ 市制施行 30 周年記念誌の刊行

羽村市が市制施行したのは平成３年 11 月１日です。市史編さん事業は、羽村市が令和３年に市制施行 30 周年を迎えることを契機にスタートしました。

こうした経緯から、市制施行の記念事業の一環として、これまでの市史編さん事業の成果を記念誌としてまとめ、記念式典で配布しました。市の公式サイトでも公開しています。

市史編さん室では、皆さんのご理解・ご協力のもと編さんを進めてまいりました。本編の完成を目指して引き続き精一杯取り組んでまいります。

編さん室長の どうなる？ 今後の 市史編さん

これまでに６冊の資料編を刊行し、本編の刊行作業が進む市史編さん事業について、新年度以降の計画をお知らせします。

①『羽村市史 本編』（上巻）について

まずは令和５年度に『羽村市史 本編』（上巻）を刊行します。上巻では、羽村の自然分野に始まり、通史部分として原始・古代・中世、さらに近世までの羽村の歴史をわかりやすく記述していきます。

現在、原稿執筆と補足の追加調査が進行中で、令和５年度からは各部会の原稿のとりまとめや印刷製本に向けたレイアウト作業に入っていきます。

②『羽村市史 資料編 近現代文字資料』について

今回の市史編さん事業では、近現代分野のなかでも『羽村町史』(S49) 以降のあゆみを掘り起こすことが大きな目的の一つでした。

そのため、先に刊行した『資料編 近現代図録』に続いて、近現代では２冊目となる『資料編 近現代文字資料』を令和６年度に刊行する予定です。行政文書をはじめとしたさまざまな史料を取り上げて掲載します。

③『羽村市史 本編』（下巻）について

市史編さん事業の最後の刊行物となるのは『羽村市史 本編』(下巻) です。令和７年度の刊行を目指して作業を進めています。

下巻では、近現代における羽村のあゆみを通史として記述するとともに、羽村の民俗を多様な観点から紹介していきます。また、市内の文化財についても取り上げる予定です。

コラム

拡大版

ちっとんべぇ

平成27年の創刊号から８年にわたり発行してきた『伸びゆくはむら』の中で、一度も欠かすことなく掲載してきたのが裏表紙のコラム「ちっとんべぇ」です。

日々の市史編さん作業の中でふと気付いたいろいろな出来事から、こぼれ話的な話題を紹介してきたこのコラム。羽村の昔ことばで「ちょっと、少しばかり」という意味の「ちっとんべぇ」のタイトルどおり、「力を抜いてゆっくりと読めるコーナーで楽しみにしている」という読者の声は、紙面づくりの励みとなりました。

そんな「ちっとんべぇ」を、今回は特別企画として拡大版にしてみました。市史編さん室に所属する５人の専門調査員が、それぞれの担当分野からこれまでの『伸びゆくはむら』を振り返り、紙面作成時の思い出を語ってくれました。

表紙写真の思い出

『伸びゆくはむら』に記念すべき表紙ができたのは、第５号（H28.4）からです。

表紙の写真は、特集のテーマ内容と密接に関連しています。テーマそのものであったり、内容に関連する場所や時代と連動するものであったり、特集によってさまざまです。

屋外へ撮影に出かけた際には、表紙の構成をイメージしながら被写体を考え、被写体をメインにおさめる為のアングルを考えたり、天気の良い日を選んだりしました。

それでも、いざ表紙にしてみると暗かったり、複数枚の写真を掲載する際にはレイアウトに苦戦したりもしました。第８号（H29.1）「江戸時代のはむら」では、一峰院の鐘楼門を撮影しに行ったところ、西日で影になってしまいました（写真左）。主役の鐘楼を影にしないよう、次の日の午前中に撮影をやりなおしたこともありました（写真右）。

思わぬ出会いもありました。表紙写真のために草花丘陵から市内を撮影していたところ、対岸を駆けるイノシシを偶然発見したのです。その時の写真は、第９号（H29.4）ちっとんべぇ「イノシシとの出会い」に掲載しました。また、第11号（H29.10）「樹木が受け継ぐ物語」では、公園へ撮影に行った際に、遊びに来た園児たちと出会い、被写体になってもらいました。

『伸びゆくはむら』の顔にあたる表紙。構成から考えるのは大変でしたが、考えを深める楽しさはやりがいでもありました。

時には書き手、時には読み手

『伸びゆくはむら』で取り扱う題材の中には、時代はわからないけど古そうなもの、歴史的というよりは美術的な資料もありました。

写真は、第 28 号（R4.1）の表紙になった七福神が描かれた三幅対（さんぶくつい）の掛軸（一部分）です。縁起ものを題材にした親しみやすい作風で、福が来そう、一枚の絵ではなく三枚一組は珍しい、ちょうど新年号だからめでたい！など、資料の特徴に惹かれて表紙に決めました。

題材が決まれば、あとは執筆。大抵は興味のあることや、すでに知っている事柄を選んでいるので、大体のことは理解しているつもりなのですが、いざ調べていくと解釈が違っていたものや初めて知る言葉などが続々出てきます。それをさらに調べていって…を繰り返し、気づいたら思っていた以上のことを知る、なんてこともしばしば。この掛軸では七福神の名前を微妙に間違えて覚えていました……。

読者のみなさんにお伝えするはずが筆者自身もまるで読者のような目線で学び、時には楽しむという、これも伸びゆくはむらの魅力の一つなのかもしれません。

古文書に残るぬくもり

近現代部会では、行政機関の公文書や地域に伝え残されている文書など、さまざまな歴史資料を調査しています。その中でも旧家の蔵などに残された文書類は、『伸びゆくはむら』でもたびたび紹介してきました。

市史で使う資料としては、家や商売、地域に関わる重要な書類に注目しがちですが、家の人が個人的に大切にとっておいた文書も、人間味があってとても魅力的です。

旅先でこつこつ集めたのであろう、絵はがきのコレクション。木箱に大事にしまわれた、家族や友人からの手紙類。家業を手伝う青年が日々の出費を記した中にある、年の離れた妹によくお小遣いをあげている記録。お伊勢参りの旅の日記では、前半は見聞きしたことが細かに書かれているのに、後半はあっさりした記述になっていくのには思わず共感してしまいました。

写真の資料は、明治時代に 30 歳くらいの男性がつけた出費の記録。「酒代」が多く、お酒好きだったようです。一緒に「あふらけ（あぶらげ）」を購入していることが度々あるので、油揚げがお気に入りのおつまみだったのかなと想像しています。

どれもその時代に生きた人たちの人柄が表れていて、会ったこともないのに妙に親しみが湧く資料たちです。

遺跡発掘現場での出会い

第 21 号（R2.4）の特集「空から見た遺跡」で、過去の発掘記録写真の中から航空写真、バルーンやドローン撮影風景を見つけ、空撮をテーマに書きました。

令和３年度から４年度にかけて、発掘現場を１～２週間ごとに定期確認する機会に恵まれました。実際に現場で空高く上がるドローンを初めて見てワクワク。ドローンの導入によって、昔より短時間で空撮写真を確認でき、遺構を判別するのに役立つと伺い、感動しました。

第 29 号(R4.4)のちっとんべえ「発掘現場の秘密道具」では、現場の調査員さんの姿に触れました。その後１年を通して、夏の暑さ、冬の寒さの中、現場で作業する調査員さんの姿を見てきました（写真）。ある時、「完全な形の土器が出るのを見るのは初めてなんです」と、キラキラした表情の調査員さんが話してくれました。長年の土圧によって壊れていることが多い土器。現場を長く経験していても、そう巡りあえない瞬間だと気づかされます。現場の喜びが伝わってきて、その場に立ち会えて幸せな気持ちになりました。

『伸びゆくはむら』で担当したテーマは、発行後にも自分の中でストーリーが続いています。

やっぱりブタが好き

市史編さん室に在籍する調査員は、それぞれ専門分野が異なる人たち。各自に得意と好きがあり、その合わせ技で語らせると、思わず惹きこまれる面白さがあります。

私の得意と好きはブタ。見るのも触れ合うのも食べるのも、どれも好き。好きを語れば筆が止まりません。そこで伸びゆく羽村では、ブタを題材にすることを意識して抑えたくらいです。

その結果、ブタの登場は第 14 号（H30.7）のちっとんべえ「かわいいブタは美味しいブタ」（写真）と、第 24 号（R3.1）特集「62 年前の広報はむら」だけ。第 14 号はブタへの愛を全面に押し出し、第 24 号では町だより掲載のブタの写真に照準を定め書き出しました。とはいえ２回のみ。もう少し登場させてもよかったかなと、今振り返ってみるとやや心残りです。

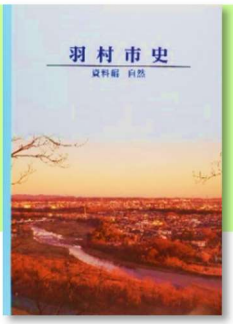
『伸びゆくはむら』に掲載された記事の本当の面白さは、行間や、その先にあるかもしれません。

私は断然ブタが好き。

既刊『羽村市史 資料編』好評発売中です

市では、市史編さん事業の成果としてこれまでに６冊の資料編を刊行しています。本編の編さんに向けて取り組んだ各分野の調査結果等をとりまとめました。

羽村市役所総合案内と郷土博物館にて１冊 2,000 円で販売しています。郵送でも購入できますので、ご希望の方は市史編さん室までお問い合わせください。



『羽村市史 資料編 自然』（平成 30 年度）

羽村市の地形・地質や気候、動植物について約４年間にわたる調査によって収集されたデータを分析し収録しました。

『羽村市史 資料編 考古・中世補遺』（令和２年度）

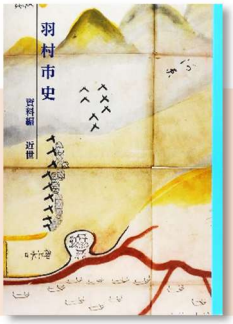
縄文時代から江戸時代までの羽村市域の代表的な遺跡や遺物を紹介しています。『中世』刊行後の調査成果を補遺として収録しています。

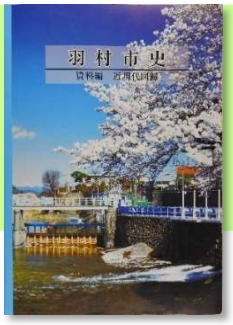
『羽村市史　資料編　中世』（平成 29 年度）

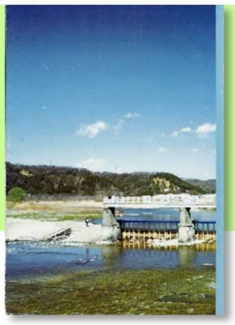
羽村市域を含む「杣保（そまのほ）」一帯を支配していた三田氏などに関する史料や、市域にある石造供養塔を収録しました。

『羽村市史　資料編　近世』（平成 30 年度）

江戸時代から明治時代の初めにかけての古文書や絵図を解説付きで掲載しています。新発見の史料や、初公開となる史料も収録しました。





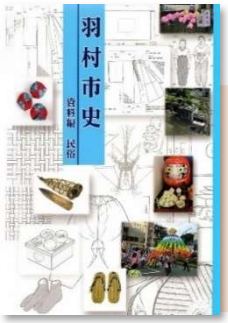


『羽村市史　資料編　近現代図録』（平成 29 年度）

明治時代以降の羽村の景観や産業、教育、鉄道や暮らしの変化やあゆみをテーマ別に収録した約 680 点の写真資料で紹介しています。

『羽村市史　資料編　民俗』（令和２年度）

羽村市域の人びとのくらしに関して、集落の成立や地域社会のしくみ、生業、衣食住、年中行事、信仰や祭り、昔話を収録し、多摩川とのかかわりや春祭りも紹介しています。



News

今後の『伸びゆくはむら』の発行について

いつも『羽村市史編さんだより 伸びゆくはむら』をご愛読いただきありがとうございます。

これまで『伸びゆくはむら』は、皆さんに市史編さん事業の進捗状況をお知らせするために年４回発行してきましたが、これからは不定期発行となります。これは令和５年度に予定している『羽村市史 本編』（上巻）の刊行に向けて態勢を整えるため、市史編さん室の業務を集約することに伴うものです。

次号の『伸びゆくはむら』は『羽村市史 本編』（上巻）の刊行にあわせて発行する予定です。どうぞお楽しみに。

「伸びゆくはむら」バックナンバーは以下の場所でご覧いただけます。

●市史編さん室（市役所西庁舎3階）

●羽村市図書館（3階地域資料コーナー）

このほか、**羽村市公式サイト**でもご覧いただけます。

▼公式サイトは
コチラから

コラム ちっとんべぇ

第 32 回「言葉のゆくえ」

とある日の市史編さん室にて。

「はい、お電話代わりました市史編さん室です！……お～、〇〇さん！今日はあによ？」

脳内で羽村弁（羽村のむかしことば）が通じる人と判断すると、私の言葉は標準語から即座に羽村弁に変わります。

私自身は生まれも育ちも羽村ですが、両親は羽村市域の出身ではないので、私自身が羽村弁を話せるはずもないのですが、私の母親の実家と私の婚家が青梅市内の旧家だったため、羽村弁とも非常に近しい語彙、イントネーション、アクセントで日常的に話しておりました。ですので、市域のみなさんが羽村弁で話されると親しみを感じてしまい、すぐさま反応してしまう…というわけです。

近頃では「あっさらしい！」（驚嘆した時）や、「ささらほうさら だんべぇ…」（いい加減なこと、だらしないこと）と言っても、なんだそれ？と目を丸くする若い世代のみなさんとのギャップを感じてしまいますが、それでもやっぱり使ってしまうんです。

どうですか？“ちっとんべぇ”羽村弁、使ってみませんか？（笑）

※「ちっとんべぇ」とは、羽村の昔ことばで「ちょっと、少しばかり」という意味です。

令和 5（2023）年 4 月 1 日発行 第 32 号 ［発行］羽村市 ［編集］羽村市総務部市史編さん室
〒205-8601 東京都羽村市緑ヶ丘 5-2-1 電話 042-555-1111 内 361･365 FAX042-578-0131